國學院大學学術情報リポジトリ

中古和文における選択疑問文について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學国語研究会 公開日: 2025-06-02 キーワード (Ja): 中古和文, 選択疑問文, 助詞, 「や」, 「か」 キーワード (En): 作成者: 藤原, 慧悟 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001694

中古和文における選択疑問文について

藤原　慧悟

キーワード：中古和文、選択疑問文、助詞、「や」、「か」

1　はじめに

疑問文は、真偽疑問文・補充疑問文・選択疑問文の３タイプに分類されることが多い[注1]。現代共通語における各タイプの疑問文の例を（１）～（３）に示す。

（１）　来たのは太郎ですか？　（真偽疑問文）

（２）　来たのは誰ですか？　（補充疑問文）

（３）　来たのは太郎ですか？　それとも、次郎ですか？　（選択疑問文）

中古和文においても（４）～（６）のように各タイプの疑問文が確認できる。

（４）　（薫）「道定朝臣は、なほ仲信が家にや通ふ」、（随身）「さなむはべる」と申す。　（源氏物語・浮舟、⑥176、真偽疑問文）

（５）　（夕霧）「五節はいつか内裏へは参る」と問ひたまふ。（兄弟）「今年とこそは聞きはべれ」と聞こゆ。

（源氏物語・少女、③65、補充疑問文）

（６）　（僧）「鬼か、神か、狐か、木霊か。かばかりの天の下の験者のおはしますには、え隠れたてまつらじ。名のりたまへ、名のりたまへ」と、

（源氏物語・手習、⑥284、選択疑問文）

しかし、選択疑問文は真偽疑問文・補充疑問文に比して用例が少なく[注2]、記述が進んでいない。そこで、本稿では、中古和文における選択疑問文について調査を行ない、その種々の文型の特徴を考察する。

2　疑問文の分類

選択疑問文の調査の前に、本稿における疑問文の分類について述べる。前節に見た疑問文のタイプの分類は、「話し手にとって何が不明なのか」（日本語記述文法研究会2003：23）、「＜疑い＞が生じる要因」（安達太郎2018）という観点によることが多い。しかし、この観点では、一般に真偽疑問文に分類される（７）と選択疑問文に分類される（８）を区別できない。

（７）　一緒に行く？

（８）　一緒に行く？　それとも、行かない？

（７）と（８）は、話し手にとって何が不明か（「聞き手が一緒に行くか否か」）が共通している。両者の違いは「何を問うか」ではなく「どう問うか」であり、区別するには選択肢の提示の有無という観点が必要である[注3]。

一方で、選択肢の提示の有無という観点だけでは、（９）と（10）を区別できない[注4]。

（９）　白と黒、どちらが好き？

（10）　白が好き？　それとも、黒が好き？

（９）と（10）は、どちらも選択肢を提示している。しかし、不定語を用いる（９）のような疑問文は、（11）のような選択肢を一つしか提示しない疑問文、（12）のような一つも提示しない疑問文と連続的で、表現上の選択肢の提示は本質的でないと言える。

（11）（白のシャツを手に取って）黒とどちらが好き？

（12）（２枚のシャツを手に取って）どちらが好き？

中古和文の例も示す。（13）（14）は選択肢を複数提示する例、（15）は一つしか提示しない例、（16）～（18）は一つも提示しない例である。（15）には（６）と同じ文型の選択疑問文である「今日か明日か」が含まれているが、「いづれ高けむ」に対する選択肢は波線部「我が世をば『今日か明日か』と待つかひの涙の滝」である。

（13）　わが髪の雪と磯辺の白波といづれまされり沖つ島守（土佐日記、36）

（14）　ゆく水とすぐるよはひと散る花といづれ待ててふ言を聞くらむ

（伊勢物語、157）

(15)「いざ、この山のかみにありといふ布引の滝見にのぼらむ」といひて見るに、その滝ものよりことなり。……。そこなる人にみな滝の歌よます。かの衛府の督まづよむ。

（布引ノ滝ト）わが世をば今日か明日かと待つかひの涙の滝といづれ高けむ　（伊勢物語、191）

(16)（源氏→夕顔）「げに、（私ト貴女ト）いづれか狐なるらんな。ただはかられたまへかし」となつかしげにのたまへば、

（源氏物語・夕顔、①154）

(17) 秋のけしきも知らず顔に、青き枝の、片枝いと濃くもみぢたるを、

（薫→大君）おなじ枝を分きてそめける山姫に（染メタ枝ト染メテイナイ枝ト）いづれか深き色ととはばや

（源氏物語・総角、⑤257）

(18) ひととせ、入道殿の大堰川に逍遥せさせたまひしに、作文の船・管弦の船・和歌の船と分かたせたまひて、その道にたへたる人々を乗せさせたまひしに、この大納言殿のまゐりたまへるを、入道殿、「かの大納言、（作文ト管弦ト和歌ト）いづれの船にか乗らるべき」とのたまはすれば、「和歌の船に乗りはべらむ」とのたまひて、

（大鏡、116）

以上から、本稿では、不定語の使用の有無を分類の観点として加えて、不定語を用いて選択肢の提示を本質としない（9）のような疑問文を補充疑問文に、不定語を用いずに必ず複数の選択肢を提示する（10）のような疑問文を選択疑問文に分類する。

本稿における疑問文の分類を表1に示す。

表１　疑問文の分類

	選択肢の提示	不定語の使用
真偽疑問文	×	×
補充疑問文	○／×	○
選択疑問文	○	×

選択疑問文は、真偽疑問文と補充疑問文のそれぞれに対して共通点と相違点を持つ。本稿では相違点を重視して、選択疑問文を独立したひとつのタイプとして位置付ける[注5]。

３　選択疑問文の文型

小田勝（2015：253）は、古典文における選択疑問文について「不定の事物を候補としてあげる場合には「か」が、「A であるか、A でないか」を問う場合には「や」が用いられる」と述べて、前者の例として（19）を、後者の例として（20）を示している。

（19）（僧）「鬼か、神か、狐か、木霊か。かばかりの天の下の験者のおはしますには、え隠れたてまつらじ。名のりたまへ、名のりたまへ」と、
（源氏物語・手習、（６）の再掲）

（20）　名にしおはばいざ言問はむみやこどりわが思ふ人はありやなしやと
（古今和歌集411／伊勢物語、122）

また、小田勝（2021）では、「複数の語句を候補としてあげる選択疑問文（§9.4）に対し、疑問文自体を複数並置して、そのどれに該当するかという逡巡の意を表す表現形式」である「疑問文並置」の例として（21）を示している。

（21）　年の内に春は来にけり一年を去年とや言はむ今年とや言はむ
（古今和歌集１）

つまり、（19）（20）を語句の並置、（21）を文の並置として区別しているのである。しかし、（19）の「～か」と（20）の「～や」は、（21）の「～や～」と同様に単独で真偽疑問文としても用いられる形式である。（22）～（24）にそれぞれの例を示す。なお、（22）は複雑な構造で、補充疑問文である「などさらに『……』と問はむ」の中に引用句として真偽疑問文である「秋か」

が含まれている。

(22)　などさらに秋かと問はむ韓錦竜田の山の紅葉する世を

（後撰和歌集389）

(23)　(少将)「車はありや」と問ひたまふ。(帯刀)「御門に侍り」と申せば、

（落窪物語、54）

(24)　(薫)「道定朝臣は、なほ仲信が家にや通ふ」、(随身)「さなむはべる」と申す。　（源氏物語・浮舟、（４）の再掲）

以上から、本稿では（19）（20）と（21）とを区別せず、不定語を用いずに複数の選択肢を提示する疑問表現をすべて選択疑問文と呼ぶ[注6]。

（22）の「～か」、（23）の「～や」、（24）の「～や～」は、中古和文における真偽疑問文の基本的な文型である（岡崎正継1996：５-６、小田勝2015：245-246）。そこで、本稿ではこれらの文型に対応する（19）～（21）を中古和文における選択疑問文の基本的な文型と考えて、各文型の違いについて考察する。

なお、（25）～（27）のような潜伏疑問文は、選択疑問文と同意ではあるが単独で疑問文として用いられる形式ではないため、本稿では扱わない。現代語にも「｛在庫の有無／試験の合否／噂の真偽｝を確認する」のような表現があるが、ふつう選択疑問文に含まれない。

(25)　かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる

（古今和歌集705）

(26)　「たち返り、かならずまゐり来なむ。此度待ちて、心ざしは、ありなし見たまへ」とて、　（平中物語、528）

(27)　皆人々よみ出だして、よしあしなど定めらるるほどに、

（枕草子、193）

４　調査

本稿の調査資料は、国立国語研究所『日本語歴史コーパス　平安時代編』（バージョン2022.03）所収の16作品（竹取物語、古今和歌集、伊勢物語、土佐日記、大和物語、平中物語、蜻蛉日記、落窪物語、枕草子、源氏物語、和

泉式部日記、紫式部日記、堤中納言物語、更級日記、大鏡、讃岐典侍日記）である。コーパス検索アプリケーション「中納言」を用いて助詞「や」「か」の用例を検索し[注7]、真偽疑問文・補充疑問文の例、疑問文でない例を除外した。古今和歌集と伊勢物語に重出する和歌に含まれる選択疑問文の例は、重複して数えない[注8]。

得られた各文型の用例数は表２の通りである。

表２　選択疑問文の用例数

	例数
「～か」を並列するもの	51
「～や」を並列するもの	5
「～や～」を並列するもの	24
その他	1

「その他」とした１例は「～や～」と「～か」を並列する（28）である[注9]。この例については、「～か」についての５．１節および「～や～」についての５．３節で述べる。

（28）　御けづりぐしの大床子もなし。かかるをりにはなきにや、をさなくおはしませばかとぞ。　（讃岐典侍日記、441）

なお、現代語の「それとも」「または」などにあたる選択的提示の接続詞を用いた選択疑問文は少なく、本稿の調査で得たのは（29）の１例のみである。

（29）　中関白殿のおりて、舞台にのぼらせたまへば、「いひをこつらせたまふべきか、また憎さにえ耐へず、追ひおろさせたまふべきか」と、かたがた見はべりしに、　（大鏡、287）

本稿は接続詞の有無によって用例を分類しないが、山口堯二（1990：29-34）は接続詞を用いるものと用いないものとを区別している。ただし、接続詞を用いない例は挙例が多く、中古以前の用例も挙げられているのに対して、接続詞を用るものは極端に挙例が少なく、挙例中最も時代的に古いものは（30）である。やはり中古和文における接続詞を用いる選択疑問文の少なさが伺え

る。

(30)　抑南都をほろぼさせ給ひける事は、故太政入道殿の仰せにて候ひしか、又時にとっての御ぱからひにて候ひけるか。

（平家物語・千手前、②287）

5　考察

5.1　「～か」

もっとも例が多いのは「～か」を並列する選択疑問文である[注10]。岡崎正継（1996：172-175）は、断定の「なり」を用いた回答が多いことから、「～か」の特徴は「断定存在質問」にあると述べている。選択疑問文における「か」に上接する要素を整理すると、表３のようである（選択疑問文そのものではなく、選択肢ごとの例数を数えている）。

表３　「か」に上接する要素

	例数
名詞句	57
活用語連体形	45
テ節	2
バ節	1

名詞句と活用語連体形はもちろん、テ節とバ節も「なり」に上接し得る要素であり[注11]、統語的にも「～か」が「～なり」に対応していることが分かる。以下、上接要素ごとに用例を確認する。

まず、「名詞句＋か」である。ほとんどが名詞述語の疑問文で、「（～は）名詞句＋なり」に対応する疑問文である。

(31)　（僧）「鬼か、神か、狐か、木霊か。かばかりの天の下の験者のおはしますには、え隠れたてまつらじ。名のりたまへ、名のりたまへ」と、

（源氏物語・手習、（６）の再掲）

(32)　心あてに、「それか、かれか」など問ふ中に、言ひあつるもあり、

（源氏物語・帚木、①56）

(33)　（源氏）「……。罪なくて罪に当たり、司位をとられ、家を離れ、境を去りて、明け暮れやすき空なく嘆きたまふに、かく悲しき目をさへ見、命尽きなんとするは、前の世の報いか、この世の犯しかと、……」と、　（源氏物語・明石、②226）

「われか人か」「あれか人か」の例が6例あるが、(34) を除く5例は「に（て）」「の」を伴って茫然自失の状態を表す。これらは、話し手にとって分からない内容があることを表す純粋な疑問表現ではない[注12]。

(34)　天彦のおとづれじとぞ今は思ふ我か人かと身をたどる世に

（古今和歌集963）

(35)　時しもあれ、この風の簾を外へ吹き、内へ吹きまどはせば、簾を頼みたる者ども、われか人かにて、おさへひかへ騒ぐまに、

（蜻蛉日記、329）

(36)　「念ぜよ念ぜよ」と耳おしそへつつ、まねびささめきまどはせば、われか人かのおれ者にて、向かひゐたれば、むげに屈じはてにたりと見えけむ。　（蜻蛉日記、212）

次に、「連体形＋か」である。「あるかなきか」の例が16例あるが、すべて「なり」「に」「の」を伴って目立たないあるいは弱々しい状態であることを表す[注13]。(38) のように程度修飾を受けることからも、純粋な疑問表現とは言い難い。

(37)　昔だにあるかなきかなりし中門など、まして形もなくなりて、

（源氏物語・蓬生、②349）

(38)　これ（＝中ノ君）もいとあるかなきかにて、（大君ニ）後れたまふまじきにやと聞こゆる御けはひの心苦しさを、うしろめたういみじと宮も思したり。　（源氏物語・総角、⑤335）

(39)　いとをかしげなる人の、いたう弱りそこなはれて、あるかなきかの気色にて臥したまへるさま、いとらうたげに心苦しげなり。

（源氏物語・葵、②44）

また、(40) の「するかせぬか」は冠を浅く被ったことを表していて、これも純粋な疑問表現ではない。

(40)　御冠など持て参りたれば、するかせぬかのほどに押し入れて、

(讃岐典侍日記、411)

3例ある「あらぬか」は、「名詞句＋か」に対して「別のものか」「他の何かか」の意を表す準体句で、「名詞句＋か」に準じて考えられる。

(41)　(匂宮→内記)「(宇治ノ女ガ昔ノ恋人カ) たしかには知るべきやうもなきを、ただ、ものよりのぞきなどして、それか、あらぬかと見定めむとなむ思ふ。……」　(源氏物語・浮舟、⑥116)

以上を除くと、「連体形＋か」を並列する選択疑問文は4例ある。「連体形＋か」に構文上対応する「連体形＋なり」は、背後の事情説明に用いられることが多い (田島光平1971、小田勝2015：82)。

(42)　右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなるべし。

(源氏物語・桐壺、①36)

(42)は、右近衛府の宿直人が名のる声が聞こえることの背後に「丑の刻になった」という事情があることを説明する表現である。このような背後の事情説明に用いられる「連体形＋なり」に構文上対応する「連体形＋か」を並列する選択疑問文は、背後の事情としてどの解釈が適当かを問題にする表現である。

(43)　(あこぎ)「男君おはせずと、つれづれなりつるに、頼もしの御事や。さても、おとどの許しきこえたまひつるか、北の方ののたまふか (＝大臣ガ許シタノカ、北ノ方ガ言ッテイルノカ)」と言へば、(典薬助)「おとどの君もめぐみたまふ、あが北の方はまして」と、(落窪物語、120)

(43) は、典薬助と姫君が結婚することの背後の事情として「大臣が許した」と「北の方が言っている」のどちらが正しいかを問題にしている。(44) ～ (46) も同様である。

(44)　されど倒れで、そこまでは行き着きぬるぞ、かしこきか、面なきか (＝スグレテイルノカ、厚カマシイノカ) 思ひたどらるれ。(枕草子、406)

(45)　かぎりのさまにて臥したまへる人 (＝兼通) の、「かき起こせ」との

たまへば、人々、あやしと思ふほどに、「車に装束せよ。御前もよほせ」と仰せらるれば、もののつかせたまへるか、現心もなくて仰せらるるか（＝物ノ怪ガ憑イタノカ、正気ヲ失ッテ言ッテイルノカ）と、あやしく見たてまつるほどに、（大鏡、225）

（46）中関白殿のおりて、舞台にのぼらせたまへば、「（舞ヲ嫌ガル福足君ヲ）いひをこつらせたまふべきか、また憎さにえ耐へず、追ひおろさせたまふべきか（＝言イ宥メルツモリナノカ、ソレトモ憎クテ堪ラズ、追イ下ロスツモリナノカ）」と、かたがた見はべりしに、（大鏡、（29）の再掲）

（44）は大勢に見られる恥ずかしさに耐えて女房車まで辿り着いたことについて、（45）は危篤の兼通が参内しようとすることについて、（46）は福足君が舞を嫌がるのを見た道隆が舞台に上がったことについて、それぞれ背後の事情としてどの解釈が適当かを問題にしている。「連体形＋なり」が「のだ」と現代語訳されるのに対して、（43）～（46）の「連体形＋か」は「のか」と現代語訳される。

（47）の「テ節＋か」と（48）の「バ節＋か」に対応するのは、それぞれ「逢ひしは寝てなり」「大床子なきはをさなくおはしませばなり」のような分裂文だろう。

（47）君や来しわれやゆきけむおもほえず夢かうつつか寝てかさめてか（古今和歌集645／伊勢物語、173）

（48）御けづりぐしの大床子もなし。かかるをりにはなきにや、をさなくおはしませばか（＝諒闇ノ折ニハナイノダロウカ、鳥羽天皇ガ幼イカラカ）とぞ。（讃岐典侍日記、（28）の再掲）

（48）は「～にや」と併せて理髪に使う大床子がないことについて背後の事情（理由）を問題にしている点で、「連体形＋か」との共通点がある。この例については５．３節でも述べる。

５．２　「～や」

岡崎正継（1996：170-172）は、文末の述語をそのまま用いたり否定したりする回答方法が目立つことから、「～や」の特徴は「述語確認質問」にあ

ると述べている。「～や」を並列する選択疑問文では（49）～（51）のように肯定と否定の関係にある選択肢が提示されることからも、述語の肯否に疑問の焦点があるという岡崎正継（1996）の指摘は支持される。

（49）　名にしおはばいざ言問はむみやこどりわが思ふ人はありやなしやと
（古今和歌集411／伊勢物語、（20）の再掲）

（50）　かかる身の果てを見聞かむ人、夢をも仏をも用ゐるべしや、用ゐるまじやと、定めよとなり。　（蜻蛉日記、223）

（51）　物を投げ給はせたる、あけて見たれば、「思ふべしやいなや。人、第一ならずはいかに」と書かせたまへり。　（枕草子、195）

（49）は「あり」と「なし」が、（50）は「用ゐるべし」と「用ゐるまじ」が選択肢として提示されている。また、（51）は否定の応答に用いられる「いな」が選択肢として提示されている。いずれも、ある事態が肯定されるか否定されるかを問題にする表現である。「～や」を用いる選択疑問文が他の文型に比べて少ないのは、事態の肯否を問題にすることは、真偽疑問文を用いてもできるからだろう[注14]。

ただし、焦点が述語の肯否であると言い切れない例もある。

（52）　ゐなか人の歌にては、あまれりや、たらずや。　（伊勢物語、192）

『新編日本古典文学全集』は「田舎の人の歌としては、十分な出来だろうか、まだまだというところだろうか」と現代語訳していて、ある基準を超えているかいないかを問題にしていると解釈しているが、（49）～（51）のような典型的な肯否の対応ではない。また、他の解釈も存するため、述語の肯否に焦点があることが確実な例ではない[注15]。

ところで、本稿の調査で得た用例に間接疑問文と見られるものがある。

（53）　人やそらごとをたしかなるやうに（匂宮ニ）聞こえたらむなど（中ノ君ハ）思す。（噂ヲ伝エタ人ガ）ありやなしやを聞かぬ間は、（宮ニ）見えたてまつらむも恥づかし。　（源氏物語・浮舟、⑥139）

近藤泰弘（1987）は、中古語について「いわゆる間接疑問文が存在しないのである。これは係結というものがある以上、当然のことである」と述べている。確かに、「～や」は文中に係助詞があって文末を連体形あるいは已然形

で結ぶ文ではない。しかし、(53) のような例がある以上、中古和文に「間接疑問文が存在しない」とは言えない[注16]。

5.3 「～や～」

岡崎正継 (1996) は、文中に「や」を用いる疑問文のうち文末を推量の助動詞で結ぶものは「全体疑念」を、推量の助動詞以外で結ぶものは「存在全体質問」を表すのが特徴であると述べている。「～や～」を並列する選択疑問文の用例を確認すると、肯否の関係にない事態を選択肢として提示して、どの事態が肯定されるかを問題にすることが注目される。

(54) えぞ知らぬいま心見よ命あらば我や忘るる人や訪はぬと

(古今和歌集377)

(55) 年のうちに春は来にけりひととせを去年とやいはむ今年とやいはむ

(古今和歌集1、(21) の再掲)

(56) 「……。三の君にやあはすべき、四の君にやあはすべき。いづれにか」とのたまへば、 (落窪物語、305)

(57) は肯否の関係にあるようにも見えるが、否定の語は連体節の中にある。他の例と同じく、どちらが肯定されるかを問題にしたものであろう。

(57) むくつけきこと。人ののろひごとは、おふものにやあらむ、おはぬものにやあらむ。「いまこそは見め」とぞいふなる。

(伊勢物語、198)

ただし、「～や～」を並列する選択疑問文には、「連体形＋か」を並列する選択疑問文と重なる表現がある。「名詞＋にやあらむ」およびその省略である「名詞＋にや」を除いた19例のうち、ほぼ半数にあたる9例がある事態の背後の事情としてどの解釈が適当かを問題にする表現である。

(58) (夕霧ガ) 夕暮の空をながめ入りて臥したまへるところに、若君して奉れたまへる、はかなき紙の端に、

(雲居雁→夕霧) あはれをもいかに知りてかなぐさめむあるや恋しき亡きや悲しき (＝生キテイル人ガ恋シイノカ、亡クナッタ人ノコトガ悲シイノカ) (源氏物語・夕霧、④446)

(59)　鬼や食ひつらん、狐めくものやとりもて去ぬらん（＝鬼ガ食ッタノダロウカ、狐ノヨウナモノガサラッテイッタノダロウカ）、いと昔物語のあやしきものの事のたとひにか、さやうなることも言ふなりしと思ひ出づ。　（源氏物語・蜻蛉、⑥209）

(60)　そこなる尼に「春まで命あらばかならず来む。花ざかりはまづつげよ」などいひて帰りにしを、年かへりて三月十余日になるまで音もせねば、

契りおきし花のさかりをつげぬかな春やまだ来ぬ花やにほはぬ

（＝春ガマダ来テイナイノカ、花ガ美シク咲イテイナイノカ）

（更級日記、312）

(58) は夕霧が途方に暮れていることについて、(59) は浮舟の遺骸がないことについて、(60) は花盛りの知らせがないことについて、背後の事情としてどの解釈が適当かを問題にしている。「～や～」を並列する選択疑問文にこのような表現が見られるのは、他の事態に対する背後の事情としての事態であるか否かを問わず、単純にどの事態が肯定されるかを問題にする文型だからではないか。

すでに５．１節で言及した、「～や～」と「～か」を並列して背後の事情の解釈を問題にする（63）があり得るのは、「～や～」と「～か」の表現性が重なり得るからだろう。

(63)　御けづりぐしの大床子もなし。かかるをりにはなきにや、をさなくおはしませばか（＝諒闇ノ折ニハナイノダロウカ、鳥羽天皇ガ幼イカラカ）とぞ。　（讃岐典侍日記、(28) の再掲）

６　おわりに

本稿では、中古和文における選択疑問文を調査し、次のことを明らかにした。

１　「～か」を並列する選択疑問文は、純粋な疑問表現でないものを除くと、すべて「～なり」に対応する。「名詞句＋か」は「名詞句＋なり」に対応する名詞述語疑問文であり、「連体形＋か」は「連体形＋なり」に対

応する、背後の事情としてどの解釈が適当かを問題にする疑問表現である。

2　「～や」を並列する選択疑問文は、ほとんどが事態が肯定されるか否定されるかを問題にする疑問表現である。

3　中古和文において、選択疑問文の間接疑問文の例が存する。

4　「～や～」を並列する選択疑問文は、背後の事情か否かを問わず、単純にどの事態が肯定されるかを問題にする疑問表現である。

今後は、上代および中世以降の資料についても調査を行なうことで、選択疑問文の歴史的変化を捉えることを課題としたい。

注

1　「補充」「選択」は質問への回答方法あるいは疑念の解消方法だが、「真偽」はそうでない。また、「明日は大学に来る？」「その荷物、持とうか？」など、真偽を問題にしない真偽疑問文もある。これらのことから、「真偽疑問文」よりも「肯否疑問文」が用語として相応しいと考えるが、本稿では一般に通用する名称として「真偽疑問文」を用いる。（1）～（3）のすべてに「太郎です」と回答することができるが、（1）に対しては肯定、（2）に対しては補充、（3）に対しては選択としての回答である。

2　高山善行（2002：81）は「まとまった数の用例がない」と述べている。

3　（7）も（8）も選択肢は「行く」「行かない」の二つしかないが、（8）は二つしかない選択肢をあえて提示することによって、（7）に比べて強く回答を求めるニュアンスを生んでいる。

4　「どちら」「いづれ」などの不定語を用いた疑問文の位置づけは先行研究によってさまざまである。阪倉篤義（1993：151）は選択疑問文（「選択的問い」）の一種であると述べている。また、小田勝（2015：254）も選択疑問文の節で例を挙げている。一方、本稿と同様に不定語を用いる疑問文を補充疑問文（「不定方式」）とする山口堯二（1990：24）は、補充疑問文についての記述の中で例を挙げている。日本語記述文法研究会（2003：28）は、「補充疑問文における疑問語の使い分け」の中で「複数の要素から何を選ぶかを尋ねるのには「どちら」（「どっち」）や「どれ」「どの」が用いられる」と述べていることから、補充疑問文に分類していることが伺える。

5　選択疑問文の位置づけは先行研究によってさまざまである。山口堯二（1990：21-23）は、不定語の使用を重視して、「不定方式」（＝補充疑問文）と「特定方式」とを大きく対立させた上で、「特定方式」の中に「並列方式」（＝選択疑問文）と「単独方式」（＝

真偽疑問文）とがあるとしている。近藤泰弘（1987）は、「疑問詞がない点では単純疑問文に似るが、「はい」「いいえ」を要求しない点では不定疑問文に似る。助詞の面では不定疑問文と同じ性格で「か」を要求する。その他多くの点で不定疑問文の類と見るべきであろう」と述べている（ただし、(20）のように「や」を用いる選択疑問文も存する)。また、小田勝（2015：245）は、補充疑問文を「述べられた命題の中にわからない部分があるという意味を表す文」と定義して、「補充疑問文の中で、……わからない部分を選択肢として提示する疑問文を選択疑問文という」と述べていて、補充疑問文の中に選択疑問文を位置づけている。

6 「行くべきかどうか」「行こうかどうしようか」のように不定語を選択肢の一つとして用いる疑問文がある。真偽疑問文と補充疑問文の並置とされることもあるが、機能的には「A か否か」を問題にする選択疑問文と同等である。ただし、本稿の調査範囲にこれにあたる例は見られない。以下の第一例は「白玉ですか。何ですか」、第二例は「うらやましいのだろうか。そうでないなら、どんな心境なのだろうか」の意であり、どちらも「A か否か」を問題にする表現ではなく、単独の真偽疑問文と補充疑問文である。

・白玉か何ぞと人の問ひし時つゆとこたへて消えなましものを　（伊勢物語、118）

・この殿（＝道長）のかくてまゐりたまへるを、帝よりはじめ感じののしられたまへど、うらやましきにや、またいかなるにか、（道隆ト道兼ハ）ものも言はでぞさぶらひたまひける。　（大鏡、321）

7 検索条件式は次の通り。　キー：((語彙素＝"や"OR 語彙素＝"か") AND 品詞 LIKE "助詞%") IN subcorpusName ＝ "平安－仮名文学" AND core ＝ "true"

8 重出歌は次の２首である。重複して選択疑問文を数えると、「～や～」を並列するものが１例、「～か」を並列するものが２例、「～や」を並列するものが１例増える。

・君や来しわれやゆきけむおもほえず夢かうつつか寝てかさめてか

（古今和歌集645／伊勢物語、173）

・名にしおはばいざ言問はむみやこどりわが思ふ人はありやなしやと

（古今和歌集411／伊勢物語、123）

9 (28）は「とぞ」以降の述語が省略されている。『新編日本古典文学全集』は「おぼゆる」などの述語を想定して、書き手の心内文と解釈している。本稿もそれに倣うが、「～にや」と「～か」がそれぞれ別の女房による発話という解釈もあり得る。その場合は、選択疑問文ではなく真偽疑問文ということになる。

10 「～かも」が用いられた例を含む。

・晴るる夜の星か河べの蛍かもわがすむかたのあまのたく火か　（伊勢物語、192）

・春山のあらしのかぜに朝まだき散りてまがふは花か雪かも　（平中物語、467）

11　テ節およびバ節が「なり」に上接する分裂文が存する。

・宮の問はせたまひしも、かかることをほの思し寄りてなりけり、などかのたまはせはつまじき、とつらけれど、　（源氏物語・手習、⑥365）

・吹く風の色のちくさに見えつるは秋の木の葉の散ればなりけり　（古今和歌集290）

12　本稿の調査範囲では、茫然自失の状態を表す「我か人か」の例は蜻蛉日記にしか見られない。ただし、他の作品にも例があるため、蜻蛉日記に特有の表現というわけではない。

・おとど心惑ひて、我か人かにもあらでのたまふ、　（うつほ物語・藤原の君、①165）

13　「～や～」にも「の」を伴う例があるが、何らかの状態ではなく「いさよひ」の内容を表し、疑問表現といえるものである。

・君や来む我やゆかむのいさよひに（＝アナタガ来ルダロウカ、私ガ行コウカトイウタメライノセイデ）槙の板戸もささず寝にけり　（古今和歌集690）

高山善行（2016）は上の例について「並列によって埋め込み可能となる」という見方を示しているが、以下のような例があるため、「の」の機能にも注目する必要があると思われる。

・人に見咎められじの心もあれば、　（源氏物語・松風、②407）

・なかなか胸いたき目をや見むの憚りに、　（源氏物語・東屋、⑥28）

・下には、いかに見たまふらむの心さへそひたまへり。　（源氏物語・竹河、⑤92）

・わが身つらくて、尼にもなりなばやの御心つきぬ。　（源氏物語・柏木、④301）

14　２節で示したように、ある事態の肯否を問題にする選択疑問文（（８））と同じ内容は、真偽疑問文（（７））を用いても問うことができる。

15　阿部俊子（1979：82）は「必要以上の表現であろうか、あるいは詞足らずであろうか（よくはわからないが）」と現代語訳している。鈴木日出男（2013：287）も同様の解釈である。この解釈を採ると、「～や～」のようにどちらの事態が肯定されるかを問題にする表現ということになる。

16　本稿の調査の範囲外でも選択疑問文の間接疑問文が複数見られる。

・逢ふことのありやなしやも見も果てで絶えなん玉の緒をいかにせん

（和泉式部続集261、『新編国歌大観』）

・秋はつる枯野の虫の声絶えばありやなしやを人の問へかし　（千載和歌集1093）

・過ちのあるかなきかを知らぬ身はいとふに似たる心地こそすれ　（拾遺和歌集1231）

なお、高山善行（2016）も、文末に「けむ」の生起する間接疑問文が中古語に存することを指摘している。

使用テキスト

国立国語研究所『日本語歴史コーパス　平安時代編』（バージョン2022.03）による。出典には『新編日本古典文学全集』のページ数（和歌の例は『新編国歌大観』の歌番号）を示した。古今和歌集を除く八代集は『新日本古典文学大系』を用いた。他の本文による場合は個別に示した。引用中の現代語訳は私による。

参考文献

安達太郎（2018）「疑問」日本語学会（編）『日本語学大辞典』東京堂出版

阿部俊子（1979）『伊勢物語（下）』講談社学術文庫

岡崎正継（1996）『国語助詞論攷』おうふう

小田勝（2015）『実例詳解古典文法総覧』和泉書院

小田勝（2021）「『実例詳解古典文法総覧』補遺稿＋源氏解読」連載第80回
https：//www.izumipb.co.jp/files/kotenbunpouhoikou/hoikou80.pdf

近藤泰弘（1987）「古文における疑問表現―「や」と「か」―」『国文法講座３　古典解釈と文法―助詞の機能』明治書院

阪倉篤義（1993）『日本語表現の流れ』岩波セミナーブックス

鈴木日出男（2013）『伊勢物語評解』筑摩書房

高山善行（2002）『日本語モダリティの史的研究』ひつじ書房

高山善行（2016）「ケム型疑問文の特質―間接疑問文の史的研究のために―」青木博史・小柳智一・高山善行（編）『日本語文法史研究３』ひつじ書房

田島光平（1964）「連体形承接の「なり」について―竹取物語を中心にして―」『国語学』56

日本語記述文法研究（編）（2003）『現代日本語文法４』くろしお出版

山口堯二（1990）『日本語疑問表現通史』明治書院